

二上山

風渡る野辺の石仏

野の石仏は、“野ざらしの芸術”ともよばれています。

香芝の人びとが数百年の間にそれぞれの願いをこめて石仏を刻み、辻々に建立しました。

阿弥陀さん、観音さん、地蔵さんもあります。刻まれている文字をみると、子どものため、父母のため、あるいは道ゆく人びとのためと、気持ちが伝わってきます。

こわそうな顔、悲しそうな顔、にこやかな顔を見てください。そして、野にある石仏と人びとの交わりを感じとってください。

そこには、香芝の人びとの歴史の一コマが漂ってきます。

二上地区



関屋地蔵尊

1 関屋地蔵尊 (関屋北 8 丁目)

像高64cm、銘文なし

柏原市国分本町・東条から香芝市関屋青葉台住宅の北辺に至る長尾街道（関屋峠越・大峠越）があります。途中の府県境で、山の稜線に沿って王寺町の明神山に向かう分岐に地蔵石仏を祀る小堂があります。

この石仏は右手に錫杖、左手に宝珠を持った通例像ですが、砂岩製であるため風化による損傷がひどく、また、腹部で2つに割れたのを繋いだ痕跡があり、痛々しい姿です。

昔、初瀬の人が峠の交通安全のため奉納されたと伝えられていますが、日を切って祈願する日切地蔵として信仰されてきました。山中にありながら、常に供花・供物があり、地域で大切に守り信仰されてきたのがわかります。



観音寺の役行者像

2 観音寺の役行者像 (田尻)

像高92cm

銘文(台石)大阪 本山講

近鉄関屋駅から西へ約1km。観音寺境内に祀られている役行者像で、大阪の本山講によって建立されました。像の左右には不動明王（像高70cm）と馬頭観音（像高46cm）石仏が祀られていますが、いずれも近年の造立です。また、隣には昭和32年に建てられた「大峯修行五十五度供養塔」があります。

観音寺は市内でも数少ない真言宗で、その位置から葛城修験との関係が注目されます。本尊は室町期の木造十一面千手観音像（像高90cm）で、楠木正成の身替観音として知られています。



地藏石仏と台石道標

3 地蔵石仏と台石道標(穴虫)

像高91cm

銘文(台石) 右當麻寺道

法界群靈

長尾街道は柏原市で関屋越と田尻越に分岐し、関屋の集落で再び合流します。関屋は江戸時代中頃から数軒の旅籠が軒を連ねて、小さな宿場町として発展してきました。石坂を下ると、あしびハイツのニュータウンが見えます。

下りきったところは、長尾街道と伊勢街道の分岐で、地藏石仏を祀る小堂があります。その石仏の台石が道標の役目を果たしていますが、現在は向きが変わって方向指示が逆になっています。

右折すれば長尾街道で、伊勢街道はここを起点として、逢阪・下田・瓦口・別所方面へと向かいます。府県境を越えてきた道は最初の大きな分岐点となります。



穴虫峠の馬頭観音石仏

4 穴虫峠の馬頭観音石仏(穴虫)

像高52cm

銘文 和州世馬中

国道165号線の穴虫から県道香芝太子線に入り約1km。穴虫峠の府県境に位置しています。

この馬頭観音は三面八臂(3つの顔と8本の腕)で表現されています。

一般に、馬頭観音は頭に戴く馬の姿から、牛馬、とくに馬の供養や無病息災の祈願をこめて建立され、峠や山道の交通の難所、村はずれの追分などに祀られています。

穴虫峠はなだらかな峠越えから牛馬を使った物資の運搬が盛んに行われていました。峠を越えた西穴虫の集落には、旅籠や運送業に携わる職業などがあったといい、木綿業関係者などの運搬で賑わっていたそうです。

この石仏は、そのような物資の運搬にかかわった方々によって建立されたのでしょう。今は牛馬に替わり、自動車が高頻に往来していますが、峠を越える人びとの安全をひっそり見守ってくれています。



太子道の地藏磨崖仏

5 太子道の地藏磨崖仏(穴虫)

像高54cm 天文17年(1548) 銘

銘文 玉祐逆修(右)

天文十七戊申年九月四日(左)

国道165号線の穴虫から県道香芝太子線に入ってすぐ右の丘陵中腹には、かつての太子道が断片的に残っており、太子町で竹内街道と合流していました。

この太子道の脇に高さ約1.6m、幅約2.3mの安山岩の巨石があり、その向かって右側に宝珠と錫杖を持つ地藏石仏を刻んでいます。銘文から「玉祐」という人がこの像を刻み、仏事を修法して自分の冥福を祈る生前供養を行ったものと考えられます。

なお、この巨石に「天和三(1683)年 釈崇西 亥十二月五日」とみえる墓碑が立てかけてありますが、いつごろからここに置かれてあるのかわかりません。



まんじゅう橋の地藏石仏



6 まんじゅう橋の地藏石仏(穴虫)

あなむし

像高30cm

銘文 右大阪道 八木 箱虎(右)

左さかい道(左)

穴虫の国道165号線と県道香芝太子線の分岐するあたり、東向きに位置しています。

この地藏石仏は、右手に宝珠、左手に錫杖を持つ通例像ですが、道標をかねています。右は田尻峠越で柏原市へ、左は穴虫峠越で太子町へ向かいます。後者は堺街道とも呼ばれ、分岐付近から太子道と同じ道ゆきです。

牛馬を使った物資の往来で賑わっていた穴虫峠。この石仏は、今は喧噪の中で忘れられたように佇んでいます。交通手段が替わった現代でも峠の安全を見守ってくれているようです。

なお、隣接して「大坂をわが越え来れば二上に黄葉流る時雨ふりつつ」(2185)の万葉歌碑が建立されています。



穴虫墓地の阿弥陀石仏



7 西穴虫墓地の阿弥陀石仏(穴虫)

あなむし

像高105cm 天文17年(1548) 銘

銘文 天文十七年戊申(右)

七月十四日(左)

国道165号線に面した西穴虫墓地の阿弥陀石仏です。頭部が大きく、像高が105cmあり、市内でも比較的大きな石仏の部類に入ります。また、腹部あたりで1度割れたのでしょうか、つないだ痕跡があります。これには、物資運搬の際、馬の手綱をこの石仏に巻いて休憩されていたところ、何かにビックリした馬が暴れ出し、石仏が倒れ2つに割れたとの伝承があります。

現在はお迎いの阿弥陀仏ですが、もとは国道を挟んだ向かいの新池の近くにあったとのことで、近鉄の敷設工事で現在地に移されたそうです。



穴虫の地藏石仏



8 穴虫の地藏石仏(穴虫)

あなむし

像高65cm 文化7年(1810) 銘

銘文 文化七年午八月吉日(右)

寛尊逆修(左)

国道165号線に並行する穴虫の旧道に入り、集落のやや西寄りに真善寺があります。その西側に地藏堂があります。

地藏石仏は、右手胸前で宝珠、左手に錫杖を持つ通例像ですが、光背の左下に「寛尊逆修」の銘があり、寛尊という人が仏事を修法して自分の冥福を祈る生前供養を行ったものであることがわかります。

穴虫には、太子道沿いに天文17年(1548)銘の地藏磨崖仏がありますが、同じく「玉祐逆修」とあります。

地藏堂は文化8(1811)年の建立になります。



穴虫の地藏石仏

9 穴虫(二上)基地の阿弥陀石仏(穴虫)^{あなむし}

像高73cm 天文10年(1541)銘

銘文 天文十年辛丑(右)

七月十四日(左)

近鉄二上駅から南へ約500m。穴虫墓地に祀られているお迎いの阿弥陀石仏です。

西穴虫墓地の阿弥陀石仏(天文17・1548年)と比べて、小ぶりで薄い板状の石仏ですが、両者には様式的に共通点が多く注目されます。



志満堂の地藏石仏

10 志満堂の地藏石仏(畑)^{しまんどう}

像高16.5cm 寛正3年(1462)銘

銘文 寛正三年壬午(右)

十二月二十三日(左)

近鉄二上山駅から西へ600m、個人邸の裏にある志満堂に祀られています。

高さ72cm、幅27cmの凝灰岩に舟形光背を浅く彫りくぼめ、その中に右手に宝珠、左手に錫杖を持つ地藏石仏が刻まれています。頂部にほぞ造りが残り、当初は笠石が載っていたことがわかります。光背の銘に「寛正三年」とみえ、市内の在銘石仏としては最古といえます。

近くには大和武士岡氏の畑城跡(岡城跡)があり、志満堂は数万(人)堂から転化したとの伝承もあることから、戦乱で多くの人々が亡くなった地ではないかと考えられます。

なお、志満堂とはこの石仏を祀る小堂を指しますが、現在の堂域からみて、当初は別に立派なお堂があったものと思われる。



一本松の阿弥陀石仏

11 一本松の阿弥陀石仏(畑2丁目)^{はた}

像高105cm 寛正4年(1463)銘

銘文 寛正四癸未十月十五日(右)

六斎念仏之為結集敬白(左)

この石仏は砂岩系の巨石を舟形に彫りくぼめ、来迎印の阿弥陀如来立像を彫出しています。「寛正四年」銘があり、市内の在銘石仏としては「志満堂の地藏石仏」に次いで古いものです。

この場所は専称寺(畑)の旧境内地とされていますが、詳しいことはわかっていません。また、二上山の夕日に照らされる恰好の位置にあり、山越阿弥陀の信仰を彷彿させます。



春日野の地藏石仏



12 春日野の地藏石仏^{はた}(畑2丁目)

像高68cm、銘文なし

二上小学校前から国道165号線に沿って東へ約150m、右折して磯壁方面へ向かい約60m入った小堂に祀られています。

凝灰岩製で宝珠、錫杖を持つ通常形の地藏石仏です。銘は刻まれていませんが、「鯰地藏石仏」(天文10・1541年)と像容が似通っています。

穴虫峠から磯壁に至る堺街道沿いには、天文10年と同日(1548)年に造立された石仏が5体所在します。この石仏も同時期に造立されたものと考えられますが、集中して製作された理由がわかりません。ただ街道沿いに点在し道標的な役割を担っていたとするよりは、銘文等から供養仏と考えることもできるため、自然災害や疫病の流行などがあったのかも知れません。いずれにしても、堺街道が古くから利用されてきたことを物語る証人であり、この一群は貴重な文化財です。



破壊された地藏石仏



13 破壊された地藏石仏^{はた}(畑2丁目)

残存高50cm、銘文なし

JAならけん二上経済センター近くの小堂に祀られている地藏石仏です。頭部から左脚部あたりまで、右手首先が完全に破壊されています。これは明治期の廃仏毀釈で破壊されたものと考えられます。

これまで紹介した石仏の中にも1度壊したものを、再びつなぎ合わせて祀っている像がありますが、これらは全体の一部であり、本市では激しい廃仏運動はなかったものと考えられます。



歯痛地藏石仏



14 歯痛地藏石仏^{いそかべ}(磯壁1丁目)

像高58cm 天文10年(1541)銘

銘文 為宗徳□□四十八□供養(右)

天文十年丑二月廿五日勝久敬白(左)

磯壁加守墓地と磯壁集落内への分岐点に所在する安山岩製の地藏石仏です。右手胸前で宝珠、左手に錫杖を持つ通例像で、伝承では、お地藏さんに「どうぞ、歯痛を治して下さい。」とお願いすると、不思議と治ったそうで、この別名があります。銘文からは、四八周忌供養のために造られたことがわかります。



北野の商い地藏



15 北野の商い地藏^{いそかべ}(磯壁1丁目)

像高57cm、銘文なし

磯壁の集落なかほど、この地藏石仏を祀る地藏堂付近は、近世以降、交通の要衝でした。西からの堺街道は、二上小学校付近で長尾街道と道を同じくし、このお堂の前で長尾街道は分岐し南下します。東からはお堂の120mほど手前で堺街道に合流した當麻道が長尾街道と合流し當麻方面へ向かいます。

この地藏石仏には銘がなく、造立された時期はわかりませんが、面部の表情は穏やかで、まるで笑っているかのように見えます。鼻が欠け補修されているのも愛嬌がありユーモラスです。そのため、鼻欠け地藏とも呼ばれます。

名前の由来となった伝説は、紙芝居(「商い地藏」)になっており、市民図書館や市のホームページで見ることができます。



磯壁新池の地藏石仏



16 磯壁新池の地藏石仏^{いそかべ}(磯壁)

像高16cm 天保2年(1831)銘

銘文 すぐたゑま

すぐたつた

天保二卯十二月

当麻道は王寺町から上中・高・北今市・下田を経て、磯壁で堺街道に合流し「商い地藏」の地藏堂から長尾街道と道を同じくして南下します。磯壁新池で岩屋越と竹内街道方面へ分岐します。磯壁新池は、葛城市と境を接していますが、池に面して3本の道標が並んでいます。

その真ん中の道標には、小さな地藏石仏が2体刻まれています。東面する地藏の下には「すぐたつた」とあり、北面する地藏には「すぐたゑま」とみえ、参詣道として多く人びとが利用したと思われます。

また、ここは岩屋越への起点でもあります。穴虫越と同じく古代から大和と河内を結ぶ峠越えの一つでした。

五位堂地区



阿日寺の如意輪観音



17 阿日寺の如意輪観音^{りょうふくじ}(良福寺)

像高70cm、銘文なし

阿日寺は、平安時代の学僧恵心僧都源信生誕の寺として知られています。狐井街道沿いには「恵心僧都誕生霊地」とある石碑が建ち、そこから山門まで道が伸びています。この山門の右手に観音堂があり、如意輪観音が祀られています。

如意輪観音は車輪がどこにでも転がるように、意のままに現れ、現世で苦しむ人びとを救済するとされます。江戸時代後期以降の作ですが、その容姿は端正で気品があり、深く物思いに沈んだ表情に見える反面、優しいまなざしで温かく見つめられているようにも感じる不思議な像です。

由来は不詳ですが、阿日寺から南300mにある常盤寺から遷されてきた可能性があります。それは常盤寺の本尊、平安期の木造大日如来坐像(重文)が阿日寺の本堂に客仏として祀られていることから言えます。



おこりおとし地蔵尊



18 おこりおとし地蔵尊^{りょうふくじ}(良福寺)

像高57cm、銘文なし

市立三和小学校の北、古池の北側に祀られている地蔵石仏です。右手は腹部の前で宝珠をもち、左手には錫杖をもつ通例像です。

通称「おこりおとし地蔵」と呼ばれています。隣接する阿日寺住職の奥さんに意味をお聞きすると、「急な腹痛などを直してくださるということだと聞いています」とのことでした。また、管理は地蔵講でされていると聞きましたが、この日も真新しい花が供えてあり、大切に守り信仰されているのがわかります。



杵築神社一夢堂の地蔵石仏



19 杵築神社一夢堂^{いちむどう}の地蔵石仏(良福寺)

像高95cm 貞享4年(1687)銘

銘文(台石) 貞享四丁卯年(右)

幻誉一夢大徳(中)

二月廿一日(左)

杵築神社境内にある一夢堂に祀られている砂岩製、丸彫りの地蔵石仏です。右手に宝珠を持ち、左手には錫杖を持つようにしてありますが、木製であつたのか欠失しています。

「一夢堂」なんとなく今風で、それこそ夢のある話ですがその背景にあるのではと期待してしまいましたが、そのヒントは台石の銘文にありました。銘には「一夢大徳」とみえます。小堂の右手には室町期の木造十一面観音像を本尊とする観音堂があり、こちらの住職であつた方です。自らの容姿を地蔵石仏にうつして、自分の死後も村の繁栄と寺院の存続を願って造られたとの伝承があります。石仏の眼は、慈愛に満ちたまなざしですが、面部全体で見ると、厳しい視線となり、目的をもった強い意志がそこに感じ取れます。



西方寺の不動明王

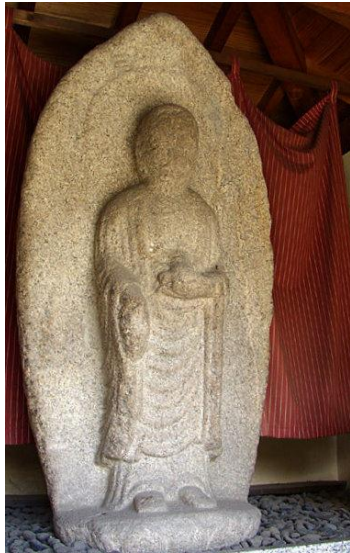


20 西方寺の不動明王^{りょうふくじ}(良福寺)

像高65cm、銘文なし

杵築神社から東へ約100m。西方寺境内の小堂に祀られている花崗岩製の不動石仏です。

右手をたて掌を外に向け、左手で絹索を持つ。不動明王というよりは、西遊記の孫悟空といった感じで愛嬌があり大変ユーモラスです。



良福寺の地藏石仏

香芝市指定文化財(平成6年3月31日・市指定第3号)

21 良福寺の地藏石仏(良福寺)

像高71.5cm、銘文なし

時代 鎌倉時代後期

良福寺の集落南端にある地藏堂に祀られている花崗岩製の地藏石仏です。左手は腹部の前で宝珠をもち、右手は掌を下に向け錫杖は表現されていません。面部は磨滅して表情がわかりませんが、それ以外は損傷も少なく良好な状態です。胸の開きや衣の処理などに均整がとれていて、丁寧に造られています。鎌倉時代後期頃の地藏信仰を伝える好資料で、市内では正楽寺(平野)の線刻阿弥陀石仏(平安時代後期)、念通寺(今泉)の不動石仏(鎌倉時代初期)に次いで古い遺品になります。

この地藏堂は下田を起点に狐井・良福寺を通る狐井街道に面しており、ここから長尾街道に合流して当麻・吉野・大峯山・高野山に至る参詣道に接続します。この石仏は、諸寺に参詣される多くの旅人の道中安全を見守ってきました。



天神社の子安地藏

22 天神社の子安地藏(鎌田)

像高45cm、銘文なし

鎌田天神社から北へ約50m。子安地藏堂に祀られる砂岩製の地藏石仏です。右手に宝珠を持ち、左手掌を立て錫杖は刻まれていません。台石は彩色されています。

もとは天神社境内の観音堂に祀られていましたが、小堂を建て、現在地に移したとのこと。観音堂には室町期の木造十一面観音像(像高101cm)が祀られています。

正徳2年(1712)の『鎌田村明細帳』には、天神社が明記されず、代わりに長福寺境内に「観音堂」と「鎮守一社」とあります。おそらく長福寺が廃寺となり、鎮守が天神社となったと考えられます。観音堂は鬼瓦に貞享2年(1685)の銘があることや天文2年(1533)銘の名号碑があり、本尊の造立時期まで遡ることができます。



宝樹寺の仏頭

23 宝樹寺の仏頭(五位堂)

残存高14.5cm、銘文なし

近鉄五位堂駅から南へ約450m。寶樹寺本堂内で祀られている砂岩製の仏頭です。高髻のため観音形とわかります。眉から鼻筋、頬も豊かで張りがあり、平安期の木彫仏を参考に造立されたのではないかと推察されます。

同寺の本尊は平安期の「木造阿弥陀如来坐像及び両脇侍立像」(市指定)で、隣接する別所の阿弥陀堂(廃寺)から遷されてきたとの伝承がありますが、この仏頭も一緒にきた可能性があります。しかし、詳しいことはわかりません。



長福寺の地蔵石仏

24 長福寺の地蔵石仏(瓦口)^{かわらぐち}

像高103cm、銘文なし

長福寺山門横の地蔵堂に祀られている砂岩製の地蔵石仏です。丸彫り、左手に宝珠、右手に錫杖をもつ通例像ですが、錫杖は木製であったのか、現在は手にされていません。江戸時代後期以降の造立と考えられます。

市内には、林法寺(下田)の地蔵石仏など、像容(姿形)が似通った砂岩製、丸彫りの地蔵石仏が多数みられます。また、像容や材質などは違いますがこの頃に造られたとみられる地蔵石仏が数多くあり、各地で地蔵講が組織され、地蔵菩薩に対する信仰が隆盛していたことがわかります。



土山池の地蔵石仏

25 土山池の地蔵石仏(瓦口)^{どやま}^{かわらぐち}

像高90cm

銘文 右別所(右)

左大垣内 足相(左)

瓦口の土山池堤の小堂に祀られている地蔵石仏で、両手を合掌する姿で表現されています。

石仏の左右に地名を指す銘文があり、道標の役目も果たしていました。

近世以降、穴虫峠から穴虫・畑・磯壁・狐井の各村を通る堺街道、長尾街道と分岐し、関屋・逢坂・下田を通る伊勢街道の合流点が瓦口でした。石仏は当初に祀られていた場所から移動している可能性があります、この付近から広陵町と別所方面に通じる道があったことがわかります。



六道峯の地蔵石仏

26 六道峯の地蔵石仏(別所)^{りくどうみね}^{べっしょ}

像高53cm

銘文 右はせ道 法界施主(右)

左なら道 □□□(左)

穴虫で長尾街道と分岐した伊勢街道は、逢坂・下田を経て国道165号沿いに東進し、瓦口・別所の集落を通り、別所最西端で大和高田市と広陵町方面へと分岐していました。

その分岐点にある小堂には、地蔵石仏が祀られています。像の左右に地名を指す銘文があり、道標の役目を果たしていました。右のはせ道は築山方面、左のなら道は、広陵町のみささぎ台から大塚・安部・足相方面へ伸びていたようです。

双方の道は現在も利用されていますが、周辺には新しい住宅が建ち並び、往時を偲ぶことができるのはこの小堂のみとなっていました。かつては多くの旅人の安全を見守ってきた石仏ですが、2つに割られ、今はその役目を終えました。しかし、廃棄されずにお堂に安置され、花も供えられ、地域のお地蔵さんとして大切に祀られています。

下田地区



鯨地蔵石仏



27 鯨地蔵石仏(狐井)

像高61cm 天文10年(1541)銘

銘文 天文十年辛丑(右)

二月八日敬白(左)

磯壁から狐井の集落へ向かう堺街道のなかほどで、東向きの小堂に祀られています。凝灰岩製の地蔵石仏で、右手胸前で宝珠を、左手に錫杖を持つ通例像です。面部が磨滅している以外は状態も良好で、銘文も肉眼で読み取れます。

以前は道を挟んだ向かい側に南向きに祀られていたそうで、2匹の鯨を描いた絵馬が奉納されていました。この石仏は、皮膚病の「なます」ができた人やあらゆる皮膚病に悩む人のお参りされたことから、この名がついたといわれています。



微笑みの日切地蔵



28 微笑みの日切地蔵(下田東2丁目)

像高94cm、銘文なし

下田の伊勢街道と狐井街道の分岐点にある日切地蔵堂に祀られている地蔵石仏です。花崗岩製で、台石の上に蓮台を3段積み、その上に左手胸前で宝珠を、右手に錫杖を持っています。台石からの総高は186cmです。

お堂正面の葛下川から拾いあげたとの伝承もありますが、全身傷だらけで、とくに腹部あたりから2つに割れたのをつないだ痕跡が痛々しい。しかし、“にっこり”笑った、ほっとする笑顔で旅人たちの道中安全を見守り、町のさまざまな移り変わりを見続けてきました。急激な町並みの変化はどのように映っているのでしょうか。この地蔵堂は、少なくとも江戸時代中期以降、地蔵講の人びとによって大切に守り信仰されてきました。

なお、昭和56年調査の『香芝町石造文化財調査綴』には、安政5年(1858)銘があるとされていますが、最近の調査では確認できませんでした。



林法寺の地蔵石仏



29 林法寺の地蔵石仏(下田東3丁目)

像高103cm、銘文なし

林法寺境内の地蔵堂に祀られている地蔵石仏です。砂岩製(台石は花崗岩)で丸彫り、右手に宝珠、左手に錫杖をもつ通例像で、銘文はありませんが、江戸時代後期頃の作と考えられます。

この石仏と本堂に祀られている平安期の木造薬師如来坐像(像高53cm)は、ともに明治初年の廃仏毀釈と明治天皇下田行幸に際し廃寺となった長松寺(下田)から遷されてきたとのこと。



下田墓地の地藏石仏



しもだ

30 下田墓地の地藏石仏(下田東5丁目)

像高73cm

銘文

★像の左右に痕跡があるが判読できない。

下田墓地の地藏石仏は、右手に宝珠、左手に錫杖をもつ通例像です。脚部で2つに割れたのを繋いだ痕跡があります。この石仏は、頭部の後ろにあるハスをテフォルメした円形の光背(頭光)が特徴です。通常石仏は背面を舟形にすることで光背を表現しています。市内には円形の頭光をもつ像が3体ありますが、ハスまで表現したものは同じ下田の日切地蔵のみです。ただ、叡福寺(太子町)の墓地にも同じものがあり、江戸時代中後期頃の流行か同じ工人の手になるものと考えられます。



西念寺の閻魔王



えん ま おう おうさか

31 西念寺の閻魔王(逢阪)

像高47cm、銘文なし

近鉄二上駅から東へ約350m、逢阪大坂山口神社に隣接する西念寺境内の小堂に祀られている閻魔王の石仏です。花崗岩製で、笏を持ち道服を着た一般的な姿で、面部は通常忿怒形ですが、磨滅していてわかりません。

冥府で亡者の罪状の軽重を決める判官を十王といい、そのうち五七日の裁判を行うのが閻魔王です。その本地とされる地藏信仰の普及によって格別の信仰を得るようになっていったと考えられています。

この小堂には、他に石造の蓮華座に座す木造の神像(像高56cm)が祀られています。



北今市墓地の地藏石仏



きたいまいち

32 北今市墓地の六地藏(北今市6丁目)

像高84cm 享保6年(1721)銘

銘文 一誉宗心 享保六年十月建立(右)

松誉妙貞 法界万霊(左)

北今市墓地の入口に祀られている六地藏石仏で、左端の地藏石仏には享保6年の銘があります。砂岩製で右手に宝珠、左手に錫杖を持つ通例像です。ほかの5体は近年の造立になります。

六地藏は、すべての生命が六道(地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道)世界で生まれ変わりを繰り返し、地藏菩薩はその六道それぞれにおいて人びとを救済するという思想から信仰されてきました。

寺院の門前や墓地入口などに祀られるようになったのは室町時代末期頃からと考えられています。

志都美地区



念通寺の不動明王

香芝市指定文化財(平成6年3月29日・市指定第2号)



33 念通寺の不動明王(今泉)

像高63.5cm、銘文なし

時代 鎌倉時代初期

JR志都美駅から西へ約900m、念通寺境内の不動堂に祀られる不動石仏です。花崗岩の不整形石材を利用して岩座に立つ不動明王を浮彫にしています。四等身半の像容でやや背詰まりの感がありますが、それがすこぶる量感を表し、県下でも鎌倉時代初期の作風を残す貴重な不動石仏として知られています。

なお、この石仏は念通寺の北方、志都美神社の神宮寺であった明王院伝来とされています。



念通寺の虚空蔵石仏



34 念通寺の虚空蔵石仏(今泉)

像高63.5cm、銘文なし

この虚空蔵石仏は、「念通寺の不動明王」と同じ不動堂に祀られています。

虚空蔵菩薩は広大な大宇宙のような無限の智慧と慈悲を持った菩薩で、本像は花崗岩製で丸彫り、右手に宝剣、左手に如意宝珠を持った姿で現されています。江戸時代後期以降の造立になると思われますが、由来についてはまったくわかりません。不動石仏と同様に念通寺北方、志都美神社の神宮寺であった明王院伝来の可能性が考えられます。



太子道の地蔵石仏



35 太子道の地蔵石仏(今泉)

像高24cm 安永8年(1779) 銘

銘文 安永八亥天(右側面)

右たつた(正面右)

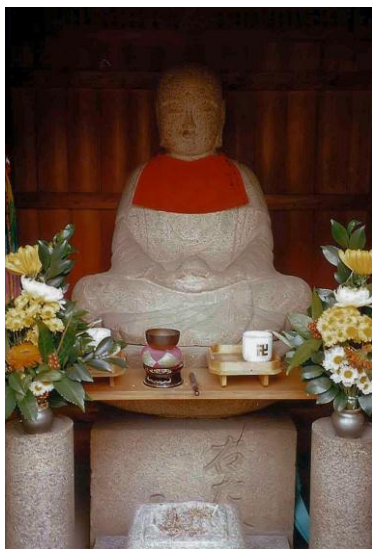
道空信士(正面中)

左大坂さかい(正面左)

四月二十一日(左側面)

志都美神社の門前、石製の標柱に道標を兼ねた合掌の地蔵石仏が建立されています。この標柱の前をかつての太子道が通っていたことを証す貴重な資料となっています。太子道は聖徳太子の亡骸を運んだ道(葬送の道)といわれていますが、太子信仰を背景に、太子を信仰する多くの方々が法隆寺から太子廟のある叡福寺(太子町)まで参拝された道であったと考えられます。

また、道沿いには、「大峯山」と刻まれた石燈籠が各所に配置され、途中、長尾街道に入り、吉野・大峯に向かう参詣道でもありました。市内の主要街道の中でもとくに社寺詣での道として賑わっていたようです。



当麻道 上中の地藏石仏

36 当麻道 ^{かみなか} 上中の地藏石仏(上中)

像高77cm

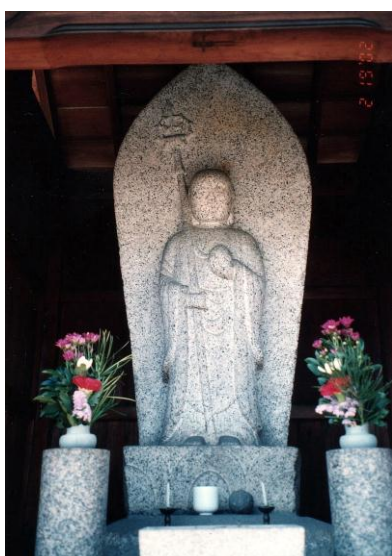
銘文(台石) 右たへまみち

当麻道は王寺町から上中・高・北今市・下田を経て、磯壁で堺街道に合流し、さらに長尾街道と道を同じくします。この道は、当麻寺・壺坂寺・大峯山・高野山・達磨寺・法隆寺・信貴山への参詣道として賑わっていました。

JR志都美駅から、下田方面へ約500m進むと、地藏石仏を祀る地藏堂があります。この石仏は花崗岩製で合掌した手に宝珠を持っています。

台石が道標となっていますが、当初から一体として造立されたようです。この小堂付近で当麻道は県道と分かれ、一直線に下田へ向います。途中、高で田原本街道と交差しますがその辻にも小さな道標があります。

かつての旧街道の雰囲気を残す町並みは、このあたりまでですが、石仏や道標が、当時の賑わいを伝えています。



死人地藏

37 死人(人喰)地藏 ^{し び と ひ と く い} 地藏(上中) ^{かみなか}

像高88cm 正徳元年(1711)銘

銘文 正徳元年(右)

— (左)判読不能

この地藏石仏は、JR志都美駅の南側、当麻道から西方志都美神社へ向かう踏切西側の地藏堂に祀られています。花崗岩製で右手に宝珠、左手に錫杖を持つ通例像です。

名前からしていわくありげですが、昔、高や上中で不幸にも亡くなった方があったと、この地藏の前を通らずに墓地まで野辺送りしました。この地藏が墓をあばくと伝えられていたため、それを信じなかったある家の主人が身内の葬列で地藏前を通り墓地へ行きました。翌朝、墓地で遺体を埋めた上に作られていた土饅頭が掘り荒らされていたそうで、それ以降地藏前を通る葬儀は行われなくなったとのことです。

この地藏堂の一角には、明和5(1768)年銘の大峯山常夜燈、不動石仏(像高45cm)、庚申塔(総高62cm)などが集められています。



万善寺の子安地藏

38 万善寺 ^{まんぜん じ} の子安地藏(上中) ^{かみなか}

像高54cm

銘文 三縁寺 二世 称誉智専尼代(右側面)
三界万霊(正面)

施主大坂住 紙屋清七(左側面)

JR志都美駅から下田方面へ約200m。萬善寺境内の地藏堂に祀られる地藏石仏、寺伝では子安地藏とされています。砂岩製で丸彫り、右手に宝珠、左手に錫杖を持つ通例像で、岩座にかかる地藏の衣が側面・背面ともに省略せず丁寧に刻まれています。江戸時代中期以降の造立。

なお、台石に「三縁寺」とみえることから、今泉の念通寺西側に所在したとされる三縁寺(廃寺)から移されてきたものであることがわかります。

境内には他、寛文2年(1662)銘の名号碑、富山県の高岡鋳物師が昭和49年に新鑄した梵鐘を釣る鐘楼、木造十一面観音像(像高93cm)や木造聖観音像(像高86.7cm)などを祀る観音堂があります。



正楽寺の線刻阿彌陀石仏

香芝市指定文化財(平成6年3月29日・市指定第1号)

39 正楽寺の線刻阿彌陀石仏(平野)

像高125.5cm、銘文なし

時代 平安時代後期

平野の正楽寺境内には、コンクリート製の覆屋の中に板状の凝灰岩(高さ230cm、幅95cm、厚さ15.5cm)を浅く線刻した珍しい阿彌陀如来像が祀られています。

銘文などは記されていませんが、緩やかに波打つ線条は優美で、平安時代後期ごろの特色をよく伝えています。市内では同時代の石仏は他に類例がなく、県内でも広陵町南郷の伝弥勒石仏(県指定)が知られているにすぎません。

なお、平野には平野古墳群があり、正楽寺の西に隣接して国史跡平野塚穴山古墳があります。そのため、この板状石は古墳に伴う石棺の棺台石を転用したものとする説があります。また、地元の方のお話では、寺で祀られるまでは、橋板として利用されていたとお聞きしています。



正楽寺の地藏石仏

40 正楽寺の地藏石仏(平野)

像高42cm

銘文(台石・五輪塔地輪)

□成大願禪門(右)

長享二年八月十六日(左)

正楽寺境内の「線刻阿彌陀石仏」(市指定)を祀るコンクリート製の覆屋の中に砂岩製の板状石に浮彫した合掌する地藏石仏が祀られています。

この石仏は3つの方形石を積み重ねて台石とし、その上に石仏を祀り、さらに笠石を置くという構成です。最下段の方形石には、五輪塔の基礎(地輪)に刻まれる梵字がみえることから、3石とも転用材とわかります。また、笠石も層塔か五輪塔の転用と考えられます。方形石は花崗岩、笠石は凝灰岩です。石仏を祀るにあたり、身近な石材を調達されたのでしょうか。

なお、最下段の方形石に、長享2年(1488)銘があります。石仏は江戸時代後期以降の造立になります。



薬師堂の役行者像

41 薬師堂の役行者像(尼寺2丁目)

像高22cm、銘文なし

般若院(尼寺)の東、薬師堂跡と呼ばれるところに、凝灰岩製の石櫃(骨蔵器・奈良時代)を祠にみたてた砂岩製の役行者像が祀られています。頭巾をかぶり、右手に経巻、左手に錫杖、足に高下駄をはいて、岩座に腰をかけています。

かつて、寺域の西側には太子道が通っていましたが、この道は吉野・大峯山に向かう修験の道でもありました。通常は厳しい表情で現される行者像ですが、この像は満面の笑みでお参りする人を受け入れています。常に花や供物があり、地域で大切にお祀りされているのうなずけます。

なお、寺域には慶長14年(1609)銘の名号碑や宝暦14年(1764)銘の大峯山上常夜燈、明和4年(1767)銘の薬師講による常夜燈が残されています。